

10. 自然現象

10-1. 時間 (季節・1日の区分)

10-1-1. 季節

四季

春： パイカル paykar。 シリパイカル sir=paykar(春になる)。3月末から4月の雪解けの頃。

夏： サク sak。 シリサク sir=sak(夏になる)。草の芽や木の芽が出るのを目印にする。タネ シリサク ワ ムン カ エプヨ チクニ カ エプヨ tane sir=sak wa mun ka epuyo cikuni ka epuyo 「もう夏になって、草も芽が出て、木も芽が出る」。

秋： シッチュク sit=cuk く sir=cuk。秋になった目印は、紅葉(ニハム フレ níham hure)である。紅葉すると、母は、「もう秋になるようだ」(タネ シッチュク ノィネ シラン tane sit=cuk noyne sir an) と言った。秋に草が枯れることをタネ ムン カ オンネ ワ オケレワ tane mun ka onne wa okere wa という。

冬： シリマタ sir=mata(冬になる)。冬になる目印は、雪が降る事。マタノシキ mata noski とは、真冬の事。雪が少し降って来る(ウパシ ポンノポンノ アシ upas ponnoponno as) と、もう冬が近いなあ(タネ シリマタ ハンケ ノィネ tane sir=mata hanke noyne) と母が言っていた。

〔白沢ナベ氏〕

月名

(トエタンネ toetanne という月の名があるかとの間に対して)、トイエタンネ to (y) etanne は、日が長い、トエタクネ to (y) etakne は日が短いという意味だが、月の名前として使っていたかどうか分からない。

スネアンチュブ suneancup という月の名があるかどうか尋ねるが、秋味が盛んに上る頃の11月に舟でスネ sune (松明) を使って漁をするので、11月頃のことだろうが、月の名前として使ったかどうか不明である。

〔白沢ナベ氏〕

まわりに和人が多く、月の名前も和人式に シサム イタク sisam itak(日本語)でシネ チュブ sine cup、トゥ チュブ tu cup、レ チュブ re cup、イネ チュブ ine cup と言っていた。

〔小田イト氏〕

年中儀礼

樽 (シントコ sintoko) に酒を作って、冬とか春に忙しくないときに、オサツやカマカの人を呼んで、ランコシで行う。ウサクマイの人とは、付き合いがなかった。熊送りとは別に行う。

〔小田イト氏〕

ハルエカムィノミ haru=ekamuynomi とは、風をひかないように冬に神様にお願いすること。米、干し魚、煙草をお膳に入れて外に置く。

〔小田イト氏〕

熊マタギに行く人は、そんなに多くないし、自分達で個人的に火の神にお願いして、山の神に伝えてもらう。コタン全体であるカムィノミ kamuynomi はない。

〔白沢ナベ氏〕

10-2. 気象・天候・災害

10-2-1. 寒さ

人が寒いと感じる時は、メラィケ merayke で表現する。クメラィケ ku=merayke(私は寒い)。クルル パクノ クメラィケ k=ururu pakno ku=merayke (ぶるぶるとふるえるように寒い)。ソモ エメラィケ、アフン マ アペクル ヤン somo e=merayke, ahun ma ape=kuru yan (寒くないかい、入ってあたりなさい)。

外が寒いのは、mean で表現する。タント アナクネ メアン フミ tanto anakne mean humi (今日は、寒いなあ)。

タシコロ taskor は、夜の寒さ、冷え込みに用いる。タノクラン タシコロ tanokuran taskor (ゆうべはしばれたな)。タシコロ アン フミ taskor an humi (冷えるなあ)。

手が冷たい、水が冷たい事を ナム nam という。クテケ アリキンネ ナム マ オケレ ku=teke arkinne nam ma okere(私の手が冷たくなった)。クテケ カ エテケ カ ナム ku=teke ka e=teke ka nam (私の手もおまえの手も冷たい)。

凍る事を、コンル ルプシ konru rupusという。

支笏湖は、昔は、バチバチ曳きを出来るくらいに厚く凍ったものらしい。50~60cmも氷があった。

〔白沢ナベ氏〕

千歳川は、凍らなかった。冬に葬式があっても死んだ人を舟に乗せて渡すくらいだ。

〔小田イト氏〕

千歳川は、流れが速いので凍らないのだろう。恵庭川は凍る。千歳川は、凍らなかったのも冬でも舟で渡った。チプ アニ パテク クサン cip ani patek kusan (舟で渡る)。クシ タカ チセ ペ ネ クス エンクサン ヤン kusi ta ka cise pe ne kusu en=kusan yan (向こう岸に家があるので渡してくれ)。

〔白沢ナベ氏〕

ナイベツは、ナム マクカ nam makka (わき水)があるので、冬には川が凍らずに、湯気

が立っている。冬にカジカとり (エソッカ コイキ esokka koyki) をした。

オカ スィ オ克蘭 ペッ ルプシ アナン(ルエアン)ネーナ oka suy okuran pet rupus a nan (rue an) ne na (また、ゆうべ川が凍った)。

氷が融けるのは、ルー ru という。ルプシ ウシ タネ ルー アナン(ルエアン) rupus usi tane ru a nan (rue an) (凍ったところが融けた)。コンル ルー アナン konru ru a nan (氷が融けた)。ペッ ルー アナン pet ru a nan (川が融けた)。

〔白沢ナベ氏〕

立木が樹氷のようになることをチクニ レクシ ルェ ネ アン cikuni rek=us rue ne an という。

つらはは、ノキ コンル noki konru という。太くて長いつらが下がるとパーピリカ pa pirka (作が良い) という。

父の話だと、川の底から凍みて来るといふ。川底の石が凍って、氷の中に閉じ込められて(ペッ アサム コンル コル クス pet asam suma konru kor kusu) 流れる事があるそうだ。

母の話だと、根志越 (ネシコシ nesikosi <nesko usi) にいた時に、千歳川が真冬に干上がってしまった。おかしいと言うことで、若い者がカンジキを履いて、川上へ見に行ったそうだ。川の上の神社の上手は、チカプ ト ハッター cikap to hattariという深みだが、そこに氷が詰まって川がせき止められていたそうだ。石川さんの家までずっと氷が詰まっていたので川の水が流れなくなっただらしい。

川の流水をモムペ mompe という。モムペ サン mompe san (氷が流れて来る)。コンル ポネポネ ワ モム コルカ konru ponepone (?) wa tanto mom korka (氷が流れて来る)。

冬の夜に寒さが厳しいと立木が凍って大きな音を出して割れる(ニ プシ ni pus)あるいは、チクニ プシ cikuni pus)。

霜柱をシン ルプシ (sin rupus < sir rupus) とかモシン ルプシ (mosin rupus < mosir rupus) という。ガラスの霜は、ガラス ルプシ アナン garasu rupus anan という。

〔白沢ナベ氏〕

10-2-2. 暑さ

シリ ポプケ sir popke (暖かい)。シリ セセク sir sesek は、汗が出るほど暑い。タン ト シリ セセク フミ アン tantopo sir sesek humi an (今日は、あついなあ)。

日照りは、シリ サツ sir satという。マカナク ネ ワ エネ アプト カ ルィ カ ソ モキノ シリ サツ ペ ネ クス (シリ サツ マウネプ ネ クス) アイト イタプ カ (レクチ イウン イウン コルカ) レクチ サツサツ コルカ makanak ne wa ene apto ka ruy ka somokino sir sat pe ne kusu (sir sat mawnep ne kusu) aito itap ka (rekuci iun iun korka) rekuci sat sat korka (どうしたのか、雨も降らず、日照りで喉も乾くな)。

10-2-3. 台風

台風は、ウエン レラ wen rera とか シポエ レラ sipoe rera という。

台風が来た時に、家が転べば、危ないからと、家を横に走る梁(ウマムキ umamki)にまん中を縛った臼(ニス nīsu)をぶら下げて、ニス カムィ チセ エプンキネ nīsu kamuy cise epunkine (臼の神、家を守ってくれ) と言ってお祈りする。

〔白沢ナベ氏〕

台風が来たとき、梁(ウマムキ umamki)にカトゥンキ katunki をつなぎ合わせた紐でイウタニ iutani (杵)をしばりぶら下げる。

〔小田イト氏〕

10-2-4. 風

風が吹くことをレラ アシ rera as という。マツ ナウ mat naw (< mat maw) は、女風で、北風のこと。尻をはだけて、ひっくりがえっていると、尻に雪や風がぶつかって女が喜んでいる話がある。メナシ マウ menas maw は、男風と言われ(?)、苫小牧方面から吹く風。イタサプ itasap は、南の方の風で、マツ ナウ の反対。

その他に、ピカタ pikata、イカ メナシ ika menas、イカ マツ ナウ ika mat naw の風があるが詳しくは知らない(イカ ikaは越えること)。

〔白沢ナベ氏〕

10-2-5. 雲

雲をニシ nis とかニシクル niskur という。入道雲が出ることを カムィクル ヘトゥクパ kamuy kur hetukpa という。

〔白沢ナベ氏〕

入道雲をカムィニシ kamuy nis という。入道雲が出ると雨が降る。雷(カンナカムィ kanna kamuy)が来る。アプト ルィ ノィネ、ニシクル アン apto ruy noyne, niskur an (雨が降ってくるよ、雲が出ているから)。

〔小田イト氏〕

10-2-6. 霧・雨・雪

霧が出ることをウラル アツ urar at という。ペツ ウラル アツ pet urar at (川面に湯気が出る)。

雨が降ることをアプト アシ apto as という。アプト ユブケ apto yupke とは、大雨、どしゃぶりの雨。ルヤンペ ruyanpe は、ひどい雨降り。

雨の神をルヤンペカムィ ruyanpe kamuy とか雪の神をウパシカムィ upas kamuy とかは、言えるが、普段イナウを作って祈る神ではない。

大雨を止めるために祈った(カムィノミ kamuy nomi)という話がある。雪の神は、降った方がつぎの年の作が良いので祈ることはない。雪解けが遅いと、土の中のばい菌が死んでよいのだろう。ルヤンペカムィ タネ チャリ エシクテ ニウケシ チク、ヤィラムトモイタク エキ クス ネーナ ruyanpe kamuy, tane cari e=sikte niwkes cik, yayramutomoitak e=

ki kusu ne na (雨の神よ、このざるを一杯にできるなら、好きなだけ降りなさい)あるいは ルヤンペカムイ、ヤイラムトモイタク エキ クス ネーナ、タネ チャリ エシクテ エアシカイ チキ ネ パクノ エルイ ヤクカ ピリカ ナ ruyanpe kamuy, yayaramutomoitak e=ki kusu ne na, tane cari e=sikte easkay ciki ne pakno e=ruy yakka pirka na (雨の神よ、好きなだけ降りなさい。このざるを一杯にできるなら、どんなけ降ってもいいですよ) と言ってお祈りする。

〔白沢ナベ氏〕

毎日雨が降り続けることを ケシト ケシト ルヤンペ kesto kesto ruyanpe という。アプト ルヤンペ apto ruyanpe (大雨)。ウェン ルヤンペ ア クス ネブ カ ア キ カ エアイカブ、アサツケ カ エアイカブ wen ruyanpe a kusu nep ka a ki ka eaykap, a=satke ka eaykap (雨がひどくて、なにもできない。魚を干すこともできない)。雨が降り続くようなら、ざるを干し竿につるしておく。

〔小田イト氏〕

雪が降ることをウパシ アシ upas as という。ペソシ アシ (または ルイ) pesos as/ruy (みぞれ、べた雪)。サトゥパシ sat=upas は、乾いたさらさらの雪。

サトゥパシ アシ sat=upas as (さらさら雪が降る)。

根雪をシロマ ウパシ sir=oma upas 「落ち着いた雪」と言っていた。

ふぶきをウブン upun という。ウブン パツチェ upun patceは、ふぶきで地面の雪が飛ばされる。タント ウブン アシ (または、ルイ) tanto upun as/ruy (今日はふぶくね)。

ウーカ uka (堅雪) は、3月末頃から。

雪が融けることをウパシ ルー アナン upas ru anan。

雪かきをウパシケ upaskeという。ポロンノ ウパシ アシ ワ クス タント クパシケ poronno upas as wa kusu tanto k=upas=ke (たくさん雪が降ったから、雪かきをする)。雪かきに使う道具をカスケブ kaskep という。屋根の上、庭も道路もカシケブです。

〔白沢ナベ氏〕

10-2-7. 雷

雷(カンナカムイ kanna kamuy)が落ちることをカムイオニシポソ kamuy=onisposo という。アウタ カムイオニシポソ a=uta kamuy=onisposo (隣の家で雷が落ちた) (小田イト氏)。アン チクニ カシ ウン カムイオニシポソ an cikuni kas un kamuy=onisposo (あそこの木に雷が落ちた)。

〔白沢ナベ氏〕

雷がなると皆、緊張する (オリパク oripak)。雷鳴をカムイフム kamuy hum という。稲光をイメル imeru という。

〔小田イト氏〕

雷の悪口をいうと雷神が怒り、稲光が真っ赤になるという。怒らない時の稲光の色は、白い。

稲光が光ることをイメル アシ imeru as という。(11章「火の神が雷神を諭した話」を参照。
〔白沢ナベ氏〕

10-2-8. 虹

虹をラヨチ rayoci という。虹に指さすと、指が腐るとか、指させば追いかけて来るから、指さすものではないと言われて子どもの時、脅かされた。虹が出たら、追われないように虹に向かって、鎌で切る真似をするとよい。また、土の上に虹を描き、棒で切る真似をするとよい。
〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

10-2-9. 地震

地震をシリシモイエ sir=simoye という。父親の話では海にいる大きな魚があばれるので(ポロ チェブ ホチカチカ poro cep hocikacika)するから地震が起きると言われていたそうだ。ユーカラには、刀を持ってきて、炉縁木(イヌンペ inunpe)の後ろ(外側)に刺して、海にいる大きなアメマス(ポロ トゥクシス poro tukusis)に向かって、おまえの腰骨を押さえるぞ(エイクウェ ラリ e=ikkewe rari)という。

10-2-10. 洪水・津波

夏に特に洪水(オキムンベ okimunpe)がある。山が削られて(シリコトロ ソシケ(または、ルツケ) sir kotoro soske (rutke) 流れて来る。
〔白沢ナベ氏〕

昭和11年7月が最後の洪水だった。夏イモの収穫するときに畑が削られ、孵化場まで丸木舟で行ったのを覚えている。

〔小田イト氏〕

10-3. 天体

太陽と月をさして、チュブ cupという。昼は太陽は特にトカブ チュブ カムイ tokap cup kamuy というが、夜の月は、カムイ kamuy をつけず、クンネ チュブ kunne cup という。

星の名前は、明けの明星をニサツ サウオツ nisat sawot「夜明けに逃げる」、宵の明星をアロヌマン ノチュウ ar=onuman nociw「宵の星」という。

ムンヌエブ munnupep(ほうき星)という星があるが、悪い星だ(どの星に相当するか不明)。流れ星は、ノチュウ マッコイワク nociw mat=ko=iwak「妻の所へ帰る」という。

天の川は、ペツ pet「川」と考えられていた。天の川の一部(西側の方、すなわち川上の方を指して説明した)に真っ白いものがあると、千歳川に鮭が上らず(シコツ ペツ チェブ サク sikot pet cep sak)、トゥシペツ tuspet(江別か当別か不詳だが、そちらの方の川の名)にたくさん鮭が上る(チェブ オツ cep ot)。反対側(東側の方、川下の方を指して説明した)に真っ白いものがかかると、千歳川に鮭がたくさんのぼり、トゥシペツに鮭が上らない。

〔白沢ナベ氏〕

10-4. 地理・地形

10-4-1. コタンとその近隣の概況

釜加(カマカ)は、千歳川本流から離れたところにある村で、ミズモト、ツカモト、チフネ、トチギ(2軒)、トリイ、ハセガワ(2軒)など11、2軒の家があった。皆、農家をしていたが、特にミズモト、ツカモトは、水田も作っていた。水田を作っている人の生活は、シサム *sisam* (和人) よりもよかった。

根志越(ネシコシ)には、ノモト(2軒)、ミズモト、フクオカ、トリサワ、カワバタなど10軒ほどの家があった。カワバタ・アリンカタンという人は、クマ獲りの名人であった。ネシコシ出身のタホプパ ウナルペ *tahoppa unarpe* という人は、街に住んでいた。マチヤ ウンフチ *maciya un huci* 「街のおばあさん」と呼んでいた。

ランコシは、大和町から上流、ナイペツまでをいう。川に沿って細長いポロコタン(町)だ。ポロコタンというのは、人がたくさん住んでいる所という意味だ(白沢ナベ氏)。大和町には、トゥペトマイ *tupetomay* という川が流れている。

〔小田イト氏〕

川向いには、ハチローさん、シロタさん、ヒコイチ・エカシ、マゴ・エカシ、などが住んでいた。イクタサ *ikutasa* (酒宴) に行った。川向こうに渡るには、さお(トゥリ *túri*) で動かす丸木舟で行く。エン クサ ヤン *en=kusa yan* (私を渡して下さい) という。

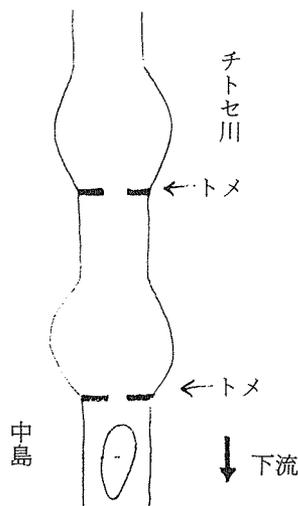
〔小田イト氏〕

ウサクマイは、ナイペツより上流の地域だ。孵化場、第4発電所、ヌナイ *nunay* 沢を通り越してずうと奥まで人家があった。

ユナイ川の尻(千歳川に出る川尻)の上に1軒家があつて、ウツキババが住んでいた。さらに上流のソッキ *sotki* にはイワヤマさんが住んでいた。ソッキに住んでいる人のことをソッキ ウン ウタル *sotki un utar* という。

〔白沢ナベ氏〕

図15. エウコッの地形



私は、孵化場の近くのエウコツ eukot という所で生まれた。エウコツは、図15のような二つのため池があったのでついた名だ。近所には、ケネタイ kenetay(ハンノキ林)もあったし、ススタイ susutay (ヤナギ原)もあった。ススタイは、川原近くのじめじめしたところ(ペチペチ pecipeci)にできる。

〔白沢ナベ氏〕

モンベツよりちょっと下流にピラポク puyrapok というところがある沢の出口に小さな滝があるのでこの名がついた。ピラポクに住んでいる人のことを、ピラポクン ウタル puyrapok un utar という。

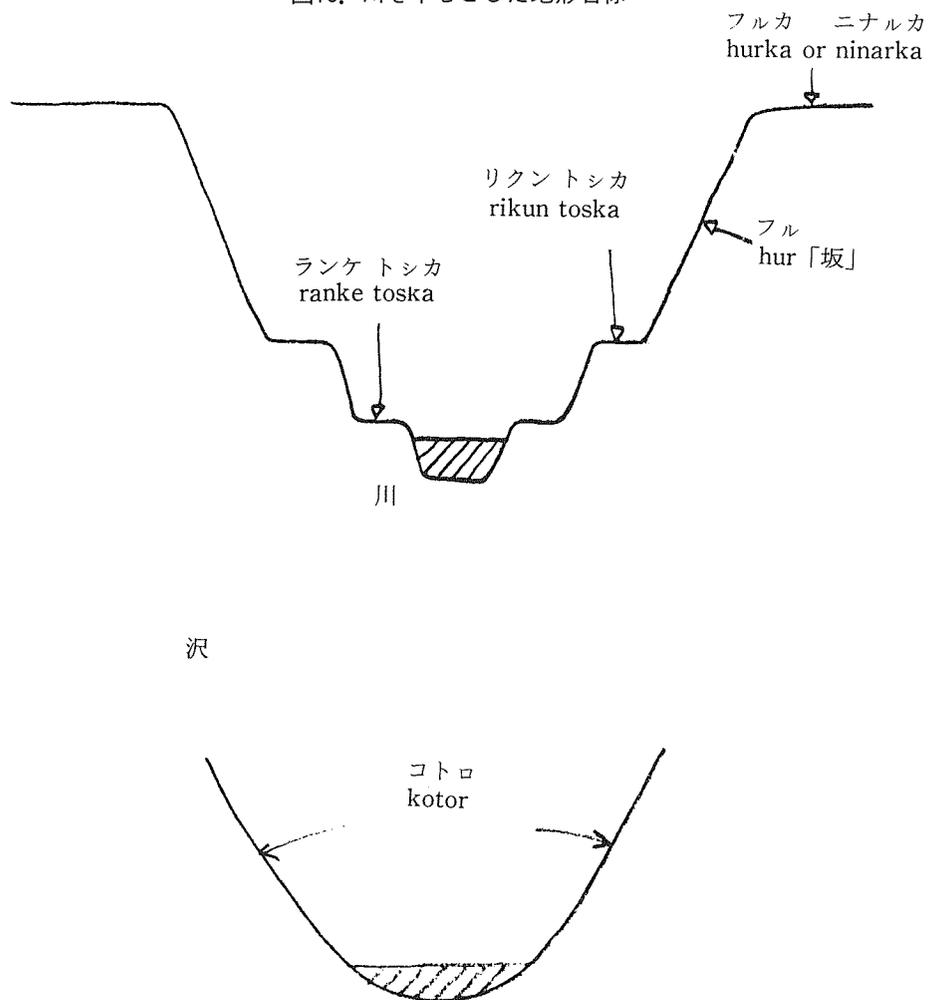
〔白沢ナベ氏〕

10-4-2. 地形名称

川をペツ pet という。ポン ペツ pon pet (小川)。ポロ ペツ poro pet (大きな川)。ナイ nay は沢のこと。ここら辺では、オサツ、イヨマイ iomay (36号線(国道)のあたりで千歳川に合流する川)、トゥMEM tumem (ネシコシにあるわき水)がそうだ。海は、アトウイ atuy という。

〔小田イト氏〕

図16. 川を中心とした地形名称



川原をピタラ pitar。スマピタラ sumapitar (石原)。草、木が茂って腐ってだんだん高くなったところもピタラ pitar という (石がなくても)。

トシカ toska (川岸、川縁) は、草、木が生えている。水辺にはホリンコ horinkoが生える。ホリンコとは、背の余り高くない草で、やちけ (湿地 ペチペチ pecipeci) に生える草の名である。川原に生えているヨシワラは、ホリンコサラ horinkosar という。(白沢氏)。トシカ toska は恐ろしい。下がえぐれていて、危ない。魚の隠れ場所だ (小田氏)。トシカ チョルポク ワ パイエ、モム マ イサム toska corpok horak wa paye, mom ma isam (川縁の下が崩れて行った。流れてしまった)。トシカでも高いのと低いのがある。ランケ トシカ ranke toska は、「低い川岸、川縁の低いところ」で、ピンニ pinni (ヤチダモ)、スス susu (ヤナギ)、ケネ kene (ハンノキ) が生える。リクン トシカ rikun toskaは、「高い川岸」で、リクン トシカ カ タ rikun toska ka ta (高い川岸に) コタンがある。ランコ ranko、たまにピンニ pinni、カリンパ karinpa (桜)、チクベニ cikupeni、オプケニ opkeni (「ひきざくら」。折ると香りがするから opkeni「放屁する木」というのだろう) が生える。トーペンニ tōpenpeni「桑の木」(実がなる) が生える。(白沢ナベ氏) 桑の木でテシマ tesma「かんじき」を作る (小田イト氏)。

ケナシ kenas とは、山の中の木のあまり生えないところだ。川のそばの木原はケナシ kenas とは、言わない (小田イト氏)。

フル hur は山の斜面。フル カリ ラパン ロ hur kari rap=an ro「坂から降りよう」、フル カリ ナベ フチ エク ワ アン マ hur kari nape huci ek wa an ma「坂を下ってナベばあさんが来ているよ」、フットム huttom (< hur=tom) は、「坂の途中」(小田イト氏)。トーペンニ、タツニ tatni (樺)、カリンパニ karinpa ni、ブンカウ punkaw (ドスナラ)、オプケニなどウサオカイペ usaokaype「いろんなもの」が生える。フル コトロ ネ ヘトウクパ チクニ オピッタ ニナルカ タ カ ヘトウクパブ ネ。エネ ネ。ヘトウクパブ ネ ルウェ ネ ナ。エラムアン ヤン hur koto ro ne hetukpa cikuni opitta ninarka ta ka hetukpa p ne. ene ne. hetukpa p ne ruwe ne na. eramuan yan. 「斜面に生える木はみんなニナルカにもはえるものだよ。そうなんだよ。はえるんだよね。わかってちょうだい。」

フルを登ると平らな所に出る。それはニナルカ ninarka という。フルカ hurka ともいう (白沢ナベ氏)。ニナルカ タ ニーナ ninarka ta nīna (「まきとり」しよう) と言った。(小田イト氏)。

白樺は山の上のほうに生える。木を切った後に生える。レタツタツニ retattatni (< retar tatni) という。ガンピは、シータツニ sītatni という (白沢ナベ氏)。

ニナルカ ninarka には榎の木が主に生える (小田イト氏、小山田直美氏)。トーペンニも生える。

フプタイ huptay (松林) は、ずっと奥に行かないとな。ヤヤン チクニ タイ パテク アン yayan cikuni tay patek an (普通の林しかない)。ペロ (péro 榎)、ランコも、ヤヤン

チクニ yayan cikuni (普通の木) だ。この辺にないのは、オンコ。柏 (トゥンニ tunni) もここにない。恵庭に行かないとない。ポロヌブ poronup (地名) という所に柏があった (白沢ナベ氏)。ポロヌブにはハスカップも生えている (小田氏)。

草原は、ムントイ muntoy という。ヨシワラをスプキサラ supkisar とかキーサラ kīsar という。トクサの生えた所を、シプシプサラ sipsipasar という。〔白沢ナベ氏〕

10-4-3. 方向名称

1) 東西南北

東をチュプカ cupka とか、コタンパ kotanpa という。コイカウンクル koykaunkur (東の人)。

西をチュプポク cuppok とか、コタンケシ kotankes という。コイポクンクル koypokunkur (西の人)。

東のことをコイカ koyka、西のことをコイポク koypok という。コイカウンク koyka unkur は東の人、コイポクンクル は、西の人。

コタンパ kotan pa (村の上手) といえば、東のこと (川下) で、コタンケシ kotan kes (村の下手) といえば、西のこと (川上)。

ヌプリパウンクル nupuri pa un kur は、東の人、ヌプリケシウンクル nupurikes un kur は、「一番ビリの人」で、西の人だ。ヌプリパウンクルも偉いが、ヌプリノシキウンクル nupuri noski un kur が一番偉い。

〔白沢ナベ氏〕

2) ペナとパナ

川上をペツペナ pet pena という。ペナタ アン フチ pena ta an huci 「川上のおばあさん」。上 (モンベツの尻あたりで、モンベツ川が千歳川に出会うところ) の人をペニウンウタル peni un utar という。

川下をペツパナ pet pana という。下の人をペツパナウンクルル pet pana un kur とか、ペツパナウンウタル pet pana un utar という。パナタ アン フチ pana ta an huci、パナ ウン フチ pana un huci 「川下のおばあさん」。

私のような者は、パナ ウン ウェンクル ウタル pana un wenkur utar 「川下に住む貧乏人」だ。

「川上へ」をヘペラ hepara という。ヘペラ パイエ アン hepara paye=an 「川上へ我々は行く」。ヘペラ パイエ アン ロ hepara paye=an ro 「川上へ行こう」。

「川上から」をホペラ hopera という。ホペラ サパン hopera sap=an 「川上の方から来る」。

「川下へ」を、ヘパシ hepasi という。ヘパシ サナン hepasi san=an 「川下へ我々は行く」。ヘパシ パイエ アン ロ hepasi paye=an ro 「川下へ行こう」。

「川下から」をホパシ hopasi という。ホパシ アリキ アン hopasi arki=an 「川下から

我々は来た」。

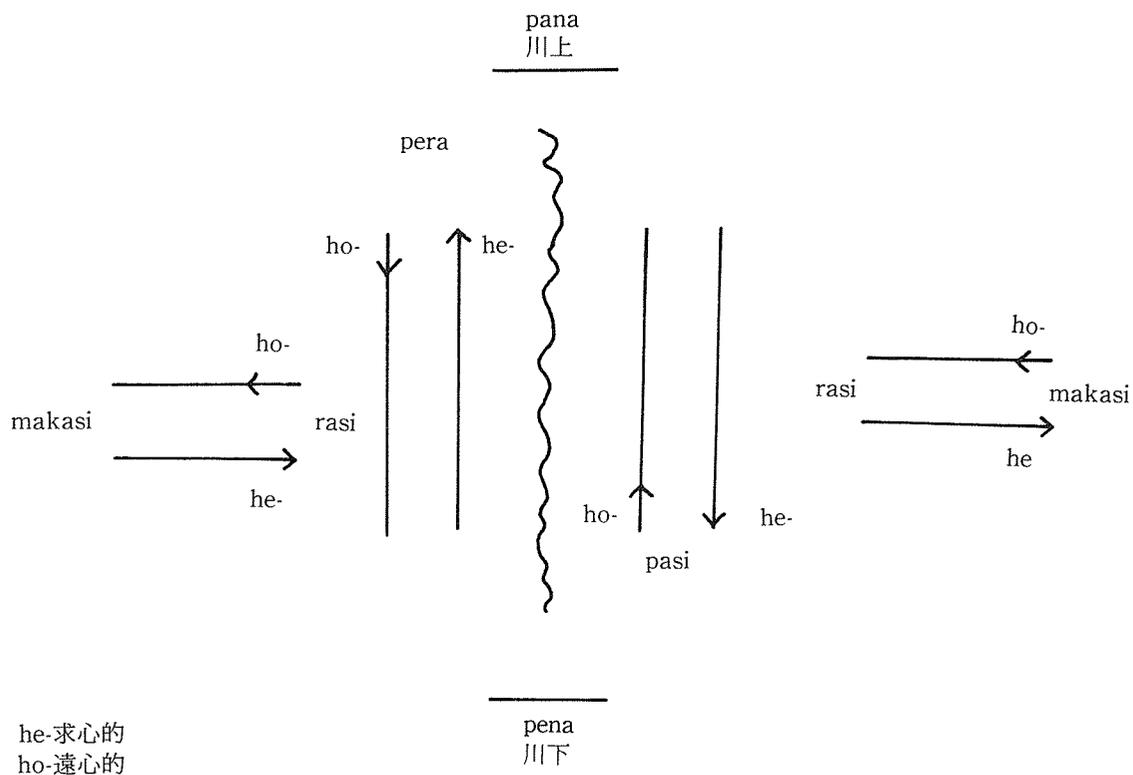
「川筋から離れて山の方へ」をヘマカシ hemakasi という。ヘマカシ パイエ アン hemakasi paye=an ro 「川筋から離れて山へ行く」。

「川筋から離れた奥の山から」をホマカシ homakasi という。ホマカシ アリキ アン ロ homakasi arki=an ro 「川筋から離れた奥の山を降りて川の方へ向かおう」。ホシビ アン ロ hosipi=an ro 「山を降りて、村へ帰ろう」。

「川筋へ」をヘラシ herasi という。ヘラシ ラナン herasi ran=an 「川の方へ降りる」。

「川筋から」をホラシ horasi という。ホラシ ヤパン ロ horasi yap=an ro 「川筋から高い方へ上がる」(パイェ アン ロ とは言わない)。

図17. 川筋の上下と左右の方位名称



「海の方へ」をエピシネ という。エピシネ サパン episne sap=an 「海に行こう」
 ペツ エトコ pet etoko は支笏湖のこと。

〔小田イト氏〕

ペテトコ pet etoko とは、川の源頭のこと千歳川のペテトコは、支笏湖のペツパル pet etoko とは、川の源頭のこと千歳川のペテトコは、支笏湖のペツパル pett par (湖から川への出口) だ。シコツ パロホ sikot paroho と言ってもよい。

〔白沢ナベ氏〕

ペトットタ イテキ シノツ アン ヤイキプテ ナ pet ot ta iteki sinot an. yaykipte na. 「川の側で遊んではだめ」(ラーケタ rāketa 「川の側」とは言わない)。

メナシ menasi とかスム sum は、風を表す言葉で、支笏湖で漁をするときに使う。

〔小山田直美氏〕

10-4-4. 地理・地名

わき水 ナム マクカ nam makka。昔から、川沿いの大きな道路が、町へ行くときとの道で、町への往来に必ず休むところがナムマクカだった。特にイナウは立ててなかった。

〔小田イト氏〕

千歳川のことをシコツ sikotと呼んだ。大きな川だからシペツ sipetともいう。ランコシやウサクマイへ行こうと言うとき、シコトゥン パイエ アン ロー sikot un paye=an ro という。

ペツパル petpar というのは千歳川が支笏湖から流れ出る川口のこと。今の鉄橋のかかっている所を言う。シコツプトウ sikotputu は千歳川の出口のこと。今、オサツ沼と言っている所は一つではなく、どうしたのだろうかと考えている。

〔白沢ナベ氏〕

ペツパル petpar に鉄橋がかかっている。シコツ パロホ sikotparoho は、湖から川が流れ出る口。

〔小田イト氏〕

千歳川は長沼（アイヌ名はわからない）をまわって、石狩のほうへ行くのではないか。

〔小田イト氏〕

千歳川の一番上流はシペツ エトコ sipet etoko のことだ。

〔小田イト氏〕

千歳川の一番端(上流)はペツパル petpar だけれども、沼(支笏湖)の一番奥はピプイ pipuy だ。ピプイの奥には鉾山もある。女はマタギに行くことないからピプイまで行くことはない。ピプイは奥の川だ。この川から流れだした水が支笏湖に流れ込み、その水が千歳川に流れ込む。ピプイだけでなく、オコタン okotan という川も支笏湖に流れ込んでいる。

〔白沢ナベ氏〕

エトコ etoko はペツパル petpar までいかない所の、途中をさす言葉だ。

〔白沢ナベ氏〕

シサムナイ sisam nay は、樽前山(ウフィヌプリ uhuynupuri)の沢で枯れ沢である。ヌマサシ numasak (?) するから、シサムナイというのだろう。

シサムナイは船で渡ってマタギに渡るところ。ペツパル petpar から舟で渡る。なぎの時なら丸木舟でみんな働きに歩いたものだ。

〔白沢ナベ氏〕

ポロヌブ poro nup はアツペナイ atpenay のこちら側だ。

〔白沢ナベ氏〕

ママチ川をママチ mamaci、その支流をイケスイ ママチ ikesuy mamaci (反対の方角

へ流れているから) という。

サッポロ sāt poro は、豊平川のこと。サッポロ ウン パイエ アン ロ sat poro un paye=an ro「札幌へ行こう」。サッポロは、父から聞いた話だが、普段は干せているが、雨がふると水が増えるところで、「水のない大きな川」という意味だ。

〔小田イト氏〕